

世界の発明王・豊田佐吉

前坂 俊之  
(静岡県立大学国際関係学部教授)



今、日本で最強、最大の企業はトヨタ自動車である。  
2005年度で売上高 19兆円、経常利益1兆円二千億円、年間世界販売数 730 万台、数年内に世界1の GM を抜いて、トップに立つ勢いだ。

その高技術力の秘密を探ると、創業者・豊田佐吉にいきつく。

日本の発明王 といわれて豊田佐吉の独創性、創造力こそトヨタの組織、技術に脈々と生きている DNA なのである。

豊田佐吉は、慶応三(1867)年二月、静岡県湖西市で農業・伊吉の三人兄弟の長男として生まれた。佐吉は小学校を出ると親父の見習い大工をさせられた。病弱で内向的だが思考力のある少年は“むっつり佐吉”というあだ名がつけられた。



郷は遠州木綿の特産地。女性が手作りで苦勞する織機を何とか機械化できないか、佐吉は大工そっちのけで狂ったように取組んだ。

大工にしたい親父と激しく対立し、西洋製機械を見るため東京へ家出することも度々、近所からは白い目でみられ、その奇行のため奇人、変人のレッテルが張られた。

<写真・保存された佐吉の生家>

明治二三(1890)年四月に上野で開かれた第三回内国勸業博覧会。連日朝から晩ま

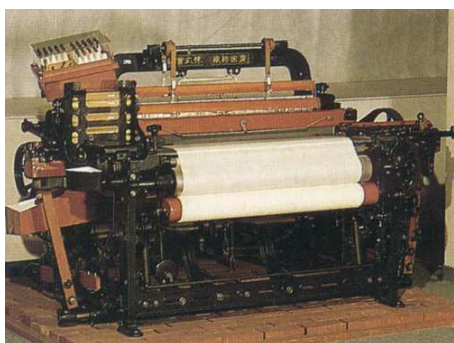
で機械の前に座り込んで度外れた熱心さで観察、研究し係員から「出て行け！」と怒鳴られた。この外国製機械からヒントを得て、同年一一月、木製人力織機の発明に成功し、翌二四年五月に最初の特許をとった。

明治29年 11 月、佐吉は日本初の動力化に成功し『木鉄混製動力織機』を発明し、織機の技術のポイントのたて糸を送り出す装置や自動拵換装置、管換式自動織機などを矢継ぎ早に発明。

この間、自分で企業を起こしたり、三井物産からの出資で会社を作るが、発明家の佐吉は商売は下手で何度も失敗する。

佐吉の発明力の秘密はその驚くべき集中力であった。

ある時、時間も忘れて思索に熱中し、アイデアが浮かんだので工場に飛び込み、「誰かおらんか」と大声でよんだが、工場は空っぽ。やっと現れた者に「誰もおらんがストライキでもやっているのか」と聞くと「今日は元日です」といわれて佐吉も苦笑いしたというエピソードがある。



朝は誰よりも早く起きて研究室に入り、夜もおそくまで閉じこもっていたので、家族の人は、何時寝たかも知らなかった。

<写真は豊田式G型自動織機>

また、研究熱心で欧米など海外の工場も度々視察して技術を学び、明治四四年、名古屋に豊田自動織布工場を設立した。

大正時代には佐吉の特許をとった織機が海外製の半値で、高技術のためまたたくまに全国的に普及、日本の紡織業のめざましい発展に貢献した。五十七歳となった佐吉は大正一三年に長男・喜一郎とともに自動織機の決定版とも言うべき『拵換式自動織機』を完成した。

これは中国、インド、米国にも数多く輸出された。当時、世界一の英国・プラット社が豊田の工場を視察して、その技術力に驚き、「マジックルーム」と激賞した。

プラット社は 昭和四年（一九二九）、この織機の欧州での特許権を10万ポンド（当時の

100 万円)で購入し、豊田佐吉は「世界の織機王」の名声を獲得した。昭和五(一九三〇)年一〇月になくなったが、佐吉が生涯に得た特許は八十四件、実用新案が三十五件、外国特許が十三件である。



佐吉のえらさ単なる発明王だけではなく、「これからは自動車の時代になる」と、時代を見通していたことだ。「一人一業」が持論の佐吉は、喜一郎に新事業として国産自動車の製造を遺言し、この 100 万ポンドを託して

<写真右・長男・喜一郎>

のトヨタ自動車へと発展した。

「まずやってみろ、失敗を恐れるな」と口ぐせの佐吉は自分で実行し、この DNA を息子にもトヨタにも叩き込んだ。エジソンや、フォードをぬいて『世界の織機王』から『世界の自動車王』を生んだのである。

**禁転載**